



まちの良さを残しながら、延焼を抑え、 避難や救助がしやすい環境づくり ～梅屋学区 防災まちづくり計画2022～



京都市京都市梅屋自主防災会
会長 関 昌一

1 はじめに

京都には昔から「自らの町から火を出さない」「自らの町は自らが守る」という自主防災の文化が息づき、京都市内では今でも元小学校区単位での地域自治活動が活発に行われています。

京都市中京区に位置する梅屋学区は、防災についても自主防災会が主体となって安心・安全に暮らせるまちづくりに取り組んでいます。

2 取組に至った経緯

梅屋学区は四周を、比較的大きな通り（道路）に囲まれる市中央部の地域ですが、学区内に足を運ぶと、古い木造建物が立ち並び、幅員4m未満の道（細街路）や行き止まりの路地（袋路）が多くあります。平成24年度には、全国共通指標の密集市街地に選定されました。令和3年度の見直しで、指標による密集市街地ではなくなりましたが、学区内には未だに多くの細街路や袋路が残っています。しかしながら、これらが「京都の魅力ある暮らし、町並み」を支えているのです。

このような経緯から、令和元年度、かねてから取り組んできた空き家対策活動を担う「梅屋まちづくり活動チーム」を「梅屋防災まちづくり活動チーム」に改編し、行政やまちづくりの専門家と協力して、防災まちづくり活動を開始しました。

3 取組内容

防災まちづくり活動の開始にあたり、次の3つの目標を立てました。①学区全体の防災意識を高める。②地域の防災上の課題を知る。③防災まちづくり計画を策定する。

まず始めに、地域の防災上の課題を知るために「防災まちあるき」と、学区全戸を対象とした「防災まちづくりアンケート調査」を実施しました。防災まちあるきでは、空き家や路地、消火器などをチェックしながらまちを歩き、問題点だけでなく、防災上の資源となるものなど、様々な視点で地域の再発見がありました。普段生活している場所でも、知っているようで実は知らない場所や物がたくさんありました。

防災まちあるきとアンケート調査で地域の課題を把握した後は、防災まちづくり計画の策定に向けたワークショップを実施しました。



防災まちあるきの様子

この間、防災まちづくりの取組を学区全体に広めるための周知・啓発活動も併せて実施

しました。総合防災訓練では、防災まちづくりブースを設置し積極的な普及啓発を行いました。また、活動の経過を記載したニュースレターも定期的に発行し、学区全体の防災意識の醸成を図りました。



ワークショップの様子

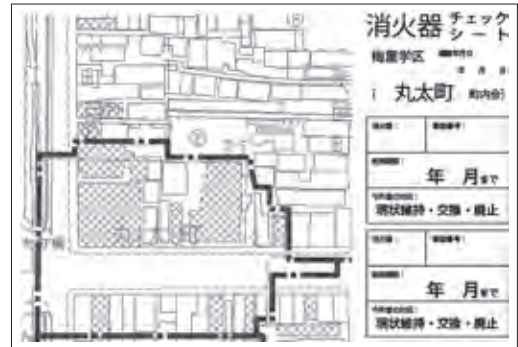
そして、令和3年度末に「梅屋学区防災まちづくり計画」を策定しました。本計画は、初期消火を重視し、共助の考えを基本として、「自分の命は自分で守る。守った命で他人を守る。」をテーマとしました。今後の防災まちづくりを進めていくための方針を6つ定め、それぞれの方針に学区、町内会、各世帯が担う役割を記載しました。

4 防災まちづくり計画に基づき実践

令和4年度に、梅屋学区防災まちづくり計画と梅屋自主防災会が、京都市から認定を受け、令和元年度から始めた3年間の取組の成果が実を結びました。

計画策定後の取組の第一弾として、消火器チェックシートを作成しました。町内に置く消火器の管理は、各町内会が担うのですが、毎年、町内会長や自主防災部長が変わってしまうため、維持管理ができていないことが問題でした。そして、今回作成した消火器チェックシートに現状を記入していただき、次年度に引き継ぐことを周知し、維持管理の

仕組作りを行いました。



消火器チェックシート（例）

防災まちづくり活動を機に、学区の防災意識も徐々に高まりつつあります。今後の活動についても、防災まちづくり計画の実現に向けて関係機関と連携しながら推し進めていきます。

5 終わりに

防災まちづくり活動の2年目と3年目は新型コロナウイルスの影響で、満足のいく活動ができず苦労しました。しかし、地震などの自然災害はいつ起こるかわかりません。限られた人員、制限された状況でどう組織を運営するか、今後の地域活動を考える良い機会となりました。

なお、梅屋学区の地域自治組織では高齢化が問題となっています。次代を担う若い世代に、是非、地域自治活動に参加していただきたいと思います。

梅屋学区の取組や防災まちづくり計画は京都市のホームページで公開されています。

<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000302162.html>

